ながら想つたことである。

がいいのかなと感心させられた。そ の晩は宿で幻燈をやつて、詳じくア

有 恒



會 岳 本 Ш  $\exists$ 

I

Ŧī. 和 年

案外餘映がないやうだ。それで日中

んの僅かばかり空を染めるだけで、

山で眺める日の出も日の入りもほ

Ш

0

空

は直射の鋭い光線に顔面も焦げるや

昭 月

られた後、モンテローザのマルガリ うだ。そして高く登れば、登る程空 れた或る日、終日雪の上に照り付け の色は黑すんで冷たい。此の様な晴 ながらも何處かに頼りの無い空虚を が、私の肺臓も大きな深い活動をし 疎は空氣の中で踠いてゐたのだ。エ 感じて、頭だけが冴えてをつた。 さうな息使ひたしてゐた者もあつた 慣れた山案内人の中にさへ、寢苦し ータの小屋に泊つたことがある。山

がアプルツチ公の紀行の中でカラコ るといふ直滑降で得意になつて滑つ て白く凍りつくやうに見える高い所 しんでゐる。月の光が温かみを失つ ヴェレストに登つた人々も睡眠に苦 きてゐる身は、憩ひ難いものだ。だ 下界の重い氣壓の布團に包まつて生 眠りが淺くなるのたらう 前か滑らされた。

思ふだらう。群青の空がなつかしい。 てゐる傍でグルカの荷貨が、すやす 私等は、苦しく喘がなければならな 行って眠り難く寝反へりなんかうつ 合が悪るいといふ話だ。ヒマラヤに 日事務所の窓から秋晴れの空を眺め りた見てゐると成る程足を揃へる方 い運命を有つてゐるのだ――と或る だが其處に登れば深海の魚のやうな やと寝てでもゐやうなら、適はぬと りと滑つてゐるお爺さんのスキー振 自信なんかてんで持ち合せてゐない 自分だつたので、輕妙にすらりすら

ビルゲリ

山スキー 1 ع

で、同宿の者一同神妙に裏手の丘の て驚いたのは、其處に出てゐる寫真 上に勢揃することになった。そして 達にスキーを教へて臭れるといふの スキーに出掛けた。或る日私と同じ に、チロルの山間キツツビユールへ 五年、歐洲の土を踏んだ初めての冬 た かと知つて思はず苦笑してしまっ の顔だ。之が有名なビルゲリーなの スキー必携」とでもいふ小さな本が 並んだ左の端から一人宛お爺さんの ホテルに泊つてゐたお爺さんが、私 届けられた。表紙をひつくりかへし 話は五年前に返へる。干九百二十

が、そこの住民は低地に降ると體具 ラムのアスコレイか何處かであつた られてしまつた。そして私の傍まで だつた。併し自分のスキーの技術に ら兩足を揃へて滑るもんだとお小言 てゆくと、忽ち「止れ、止れ」とや 出して、後の方の足に力を入れてや を頂戴してしまった。<br />
私は内心不服 ひらりと滑つて來たそのお爺さんか 私は當時日本で習つた片足か前へ

此の間丸善からビルゲリーの「山 前も聽きもせず平氣で過ごしてゐた

消してしまつたのだつた。 のない程彼は飄然とホテルから姿を 潤な私などが忘れてしまふのも無理 たのは此の本を見てからだ。全然迁

彼は千八百九十七年以來三万の生徒 ゐる。そしてかうも書かれてゐる。 は吳れたが飯りのは未ださと答へて 時は報酬を吳れましたかと此の飜譯 者が尋れた時、彼はあ、片道の旅費 教へに行つてゐる。土耳古へ行つた 端典にもそして土耳古にもスキーを い事が書いてある。彼の居る所は親 類以外のものには解るまいと。彼は そのことに就て此の本の初に面白 七 Ŧi.

で、今度はお一二の基本體操から教 た。そしてその翌る日は又スキー場

だつたのか。さうか。失敗つたと思 あのお爺さんだ。あれがビルゲリー いゝお爺さんだと思ふ丈で、別に名 ふ感で一杯になつてしまつた。 あの時はたゞ上品なそして親切な 今此の寫真を見て思ひ出したのは

のだが、今になると大分口惜しい。 帽子もかむらず若い者に愉快氣にス して浮んで來る。白髪を交へた頭に ーで騙け廻つてゐた彼の姿が颯爽と アルプス聯隊を率ねて山の中をスキ **體操の情景なんかゞ懐しく思ひ起さ** 程毎朝お一二お一二でやつたスキー れて來る。歐洲大戦の四冬墺太利の キーを教へてゐる彼の姿が。 俳し此の本を讀んでゐると、四日

併し私がそのお爺さんを思ひ出し

關西在任會員集會

方兩幹事出席する答。 になつてゐる。東京よりは小島、 關西在住會員の集會が催される豫定 十月二十六日大阪美津濃ビルに於て 松

# 十一月集會室當番幹事

十四日 十二日 十七日 П 槇 木 松 冠 暮 H 島 方 廿一日 廿六日 廿四日 十九日 廿八日 浦 角 鳥 邊松田山本

ルプスでのスキー術を脱明して吳れ にスキーを教へた。併し彼の講習は 何時でも無報酬であると。

Handbook on Mountain Ski-ing. してしまつた。 Colonel Bilgeri's と思ひ付いた。そして思はず苦笑 有難うのお禮をも云はずにゐたのだ さうだ。私は未だ此のお爺さんに 浦松 佐美太郎

### 第世五年

山岳

思ひ出を寄稿した一欄が設けられる 筈である。 山岳會創立當時の會員が二十五年の て十一月末に發刊される豫定である 之は日本山岳會廿五週年紀念號とし

二十五週年念講演命

なつてゐる。 建設基金として積立てられること、 田信道、松方三郎、三氏の豫定、會 て催される。講演者は小鳥久太、藤 十一月七日午後六時、 費は五十錢としてその收益は山小屋 朝日講堂に於



### 務 報 告

等の大體に就ての相談の 會より出向くべき講師並に講述課目 らるべき文部省主催體育講習會に本 一、八月中旬長野縣松本市に開催せ 七月三日 れたりの

新幹事七名決定(別項參照) 一、幹事增員選舉の投票を開票し、 七月三十一日 設資金募集の方針。

一、本會にて建設すべき山小屋の建

一、各幹事の事務分擔 常例幹事會 九月四日

別宮、槇、藤島 雜誌 冠、渡邊

會計 鳥山、松本 寫眞 岩永、角田

松方

調査 研究 角田 藤田

しむることの 一、本會所有山小屋建設資金募集の 「山岳」に英文欄を復活せ 一、春の後立山

一月中旬東京、

京阪神地方に 於赤坂三會堂 第四十八回小集會

毎月發行し會員並に關係方面に配布 於て、映畵と講演會を開催すること。 日本山岳會「會報」を十月より

岳會並にウエストン氏に謝意を表す |張したるを以て新刊紹介の爲め以外 は圖書の帶出を許さゞる事に決定。 一、本會二十五週年に際し、英國山 一、集會室と圖書室の二室に分離牆

二三の點を留保し大體原案承認せら 一、財廟法人寄附行爲案を審議し、 九月二十一日

### 幹事選舉

られたり。 事の増員選舉を行ひたり。六月中旬 締切り、開票の結果左の七氏當選せ 選擧通知を發送し七月二十日投票を 財團法人認可申請の前提として幹 出來る限り此の仕事を意義あらしめ る爲め御後接下さることを希望して

投票總數 投票方法 二九〇通 連記

當選者

左衙門 松本善二 角田吉夫 藤田信道 山崎彦麿 榎谷徹藏 浦松佐美 田中喜

於清水谷皆香園 左の講演あり、司會者 第四十七回小集會 六月二十九日 角田 冠幹事

、積雪期の上越國境 九月二十一日 冠 松次郎

吉夫

左の講演あり、司會者木暮幹事 利根川水源地方に就て

臺灣の山に就て 沼井鐵太郎 角田 吉夫

第一回雲崩研究會

雪崩を調査すること、なつた。その 方法として第一に冬の山に登る人た 研究部の仕事として先づ地方的に 九月十一日夜本會集會室に於て

つて、その調査表に関する項目を此 崩調査表」が送付されること、思ふ。 の山、春の山に登られた人人に「雪 來れば非常に幸である。間もなく冬 に依つて雪崩を分類して見たいと思 の研究會で討議した。登山者の雪崩 ちに雪崩調査表を送つて、その回答 々落に關する觀察を中心として何等 かの基礎的なものを求めることが出 出ず、甚だ遺憾であつた。勿論本會 附することなく追窮する積りだが。 としては此の問題を飽くまで不問に き得る事實は「銀嶺に輝く」以上に

第二回雲崩研究會

止まない。

に就いて慎重審議し、大綱を決定し 之に記入例を加へ、冬の山へ行く人 人の手許に送附することにした。 引續き前回の雪崩調査表の各項目 九月十八日夜本會集會室

山日記研究會

の改善案を作成した。その主要點は 各方面から希望があつたので、それ であり、且つ内容、體裁に就いても 日記欄は自由日記式とし、 を骨子として、明年發刊の「山日記」 本年發行の「山日記」は第一回の試 九月廿五日夜本會集會室に於て 登山注意 會室へ豫め發表して置きます。

になった。 其他の項も内容を改め記載すること

十月九日本會集會室に於て

させ度いものと思つたが、我々の聞 るならば、日本山岳會として判然と 件に關する種々な流言蜚語な、出來 詳く聴くこととした。そして此の事 |に就いて」雪崩及び救援方法を更に 山岳部の人人を煩はして「劍澤遭難 狀況を研究せんとして、帝大スキー 此度は主として現實に見た雲崩の

研究會に依つて、我々は搜索方針は 常にその屬する團體に依つて立てら 内組合自身も此の疑惑を解くべく積 極的に立つべきであると思ふ。此の 今はその確たる材料さへもない。案 件はその謎を解く可く努力しなけれ るべきであり、今後と雖も、斯る事 針葉樹 霧の旅 岳聯報告 臺灣山岳會氣報 山岳資料 ヌタック

である。 に此の會に集まられた人人は幹事以 りは我々に今更に涙を催させた。因 氏で雪崩研究が今日登山家の主要な 外に各校の先輩始め慶、帝、早、法、 題目であることを物語つてゐるもの 商大、日大立教、東北大等の部員諸

研究會の集會日及び題目は山岳會集 田信道宛で御問合せ下さい。 研究會に關する用件は山岳會氣付藤 reich. Alpen Verein. 1929. Zeitschrift des Deusch u. Oester-

La Montagne Mai-Juin, 1930

撮映の一行の素晴しく元氣な十六。 ばならぬことを教へられた。土屋氏 エヴェレスト 岩登 冬山カード Himalayan Journal No. 2. May, スサイス日記 記錄(成蹊高等學校旅行部)第一號 立数大學山岳部々報 山と溪谷 日本アルプス 銀嶺に輝く 高山植物 尾瀬と鬼怒沼 山の傳說 日本地理大系 The Geographical Journal Sep. Revue Alpine Vol XXXI. No. 1, The Canadian Alpine Journal. Album des Cabanes, Supplement. ハイランド Die Alpen Sep. 1930 マツターホルンを争ふ 1929. 最近到着書目錄抄 第二號 第五號 登山 第十二年第三四號 山岳編 帝大・山岳スキー部 ペンゼル書上譯 記 和・五・七 辻村 **新田** 田青船鈴改邊木田木 第二號 石井 久吉 主純三 計二郎勇社

伊助 伊助

Alai-Pamir Expedition Young, W. The Mountain Craft. Abraham, G. D. Complete Mount-ス

河及湖澤 £

日本風景論

志賀

重昂

會員磯員藤太郎氏寄贈書

山水無盡藏 不二山

同同同

日本山水論

名譽會員ウェストン氏寄贈 圖書目錄拔萃

Ball, J., Alpine Guide

Baedeker's., Switzerland. Various Bonney, T. G., The Building the Alps. 1912. of

Chichibu, H. I. H. Prince of. A Cambridge., The Roofclimbers Guide to St. John's. 1921.

Cambridge Mountaineering. 1925 Climb in the Japanese Alps.

Conway's Climber's Guide. Freshfield, D. W., The Life of de Saussure. 1920.

Gribble, F., The Early Mountai-Farrer, J. P., The First Ascent of the Finsteraarhorn: 1913.

Hudson, Rev. C., An Ascent of neers. 1899.

Lunn, A. H, M., Oxford Mountai-Larden, V., Recollections of Mont Blanc. 1856. Old Mountaineer. 1910. an

Mummery, A. F., My Climbs in neering Essays. 1912. the Alps and Caucasus. 1895

> Maki, Y., Some Aspects of Mount-Murray, Hand book of Switzer-

Ruskin, J., Various Works Reclus, E., The History of a aineering in Japan.

Tyndall, J., Hours of Exercise Smith. A., Mont Blanc. 1860 Mountain, 1881. the Alps. 1885. H

Weston, W., The Japanese Alps

水 前志 島 田村

Wayfarer in Unfamiliar Ja-The Playground of the Far

Alps. 1910. Two Climbs in the Japanese

Whymper, E., The Valley of Zer matt & the Matterhorn. 1897



關東學生登山聯盟消息

一、委員會 九月十九日(金)、 三時、於日本大學山岳部々室 7 一、第二學期方針決定の件 午後

懇談會開催の件

F 告』 問題對策等當面舉げられれば ち、セクション問題對策、『岳聯報 議事項として次の通り掲げられた ならい問題であつた。そして、決 出席者 二十九名。盛會なり。 、懇談會 九月二十六日(金)午後 自分自身の問題として討議す。即 セクションより出席ありて、各自 六時、於神田明治製菓二階

> 一、セクションに自治を與へよ 一、セクション會合は頻繁に開く

一、『岳聯報告』の積極的支持

一、委員會 十月一日(水)午後四時 於日本大學山岳部々室 セクション代表校決定の件

會との接觸に當る。 クション相互間の連絡並に委員 各セクションの意を尊重し、セ ヨン一校のこと。代表校會議は 代表校は原則として、 各セクシ

一、第一セクション懇親會(第一回) 語、缺席) **幽、以上四校。**(明治、日幽、外 出席校、中央、法政、 田明治製菓二階 十月四日(土)午後六時半、 日大、 於神 京

一、名稱 中央セクション。 一、代表校 持つ。 、原則として毎月一回會合か 決定事項 日本大學山岳部。

第五セクション懇親會(第二回) に花を吹かす。山の話は何度聞 座談會 いても飽きないものだ。 、次回會合に於て 、次回會合 各自、夏山の報告並に經驗談 開く。以上 十一月初旬。 研究會を

一、代表校

代表校會議開催の件

月の渦谷附近、最後に、『エヴェ 観賞にて終る。一月の槍平、七 白い報告の後、十六ミリ映畵の 相會するもの五十。夏山の面 を發行す。

ズアップにも感激させられる。 い。マロリー、アービンのクロー スト登攀物語』は只感嘆の外な レスト登攀』。流石に『エヴェレ

に發表の豫程で、目下準備を進めて 尚、『岳聯報告』 第二號は十二月迄

ある。

宿白十字三階、出席校、立教、 十月八日(水)午後六時半、於新 のアニュアルキャンプに就ての批判 日(日)大阪美津濃ビルに於て聯盟委 びキャンプ委員の感想、後に今年度 夏の行事である劔澤及び横尾の雨ア よりティーパーティーを催し聯盟の ニユアルキャンプの報告、参加校及 まつて聯盟小集會な開催した。三時 員及び加盟校、代表者二十余名が集 關西學生聯盟小集會 九月二十八

(浦高缺席) 決定事項

に就ての報告があつた。五時に之を

同志社大學よりは劔岳に於ける遭難

終り、晩餐後六時半より聯盟相談會

ける自校の動靜の概略を説明し、

を開き、聯盟の仕事の大綱の打合を

一、原則として、一學期、二學 山岳部 回會合を持つ。但し、必要に 期、それぞれ二回、三學期一 東京商科大學一橋

閉會は九時であった。

應じて隨時代表校之を開くこ

聯盟年報は十月末に出來上る筈なの

ンに於ては實行上の諸點を決定した なし、更に京都及び阪神兩セクショ

で各校の負担すべき部敷を協定した

相互研究の一助として、 闘書の飜譯、その他重要文献 次回會合、 研究プリント發行。 十二月初旬。 外國

八時より藤木九三氏の講演あり、 四輯の編輯方針に就ての希望を述べ 百五十名の聴衆があった。 會計報告、會員の意見發表、報告第

大阪堂ビル中山文化講堂にて舉行、

R·C·C·秋期總會

再度にかけて遠足した。同夜七時か 神戸布引に集合し、第一千回の遠足 戸徒歩會(K·W·S)は九月二十四日 多數の出席者あり盛會であつた。 を催し参加者約八十名で摩耶、六甲 と祝智會 内外人共同で創立した神 らは海岸通杏香樓で祝賀會を開き、 神戸徒步會 創立二十年紀念遠足



員 通

聖、赤石

り述べた。又各校から夫々今夏に於 明年のものに對する希望等を各人よ とが石、聖をやつて静岡に下りまし 先日會員山下一夫、矢鳥幸助兩兄

東醫、商大、早稻田、以上四校

り又椹鳥に出ました。 聖岳に至り、聖潔赤石澤の尾根を下 | です。此尾根筋は大正十五年前に切 山稜を赤石に登り、惡澤を往復して 上流は何處へ下りても下りられさう 澤峠を越えて椹島に下り、平凡な東一明の様です。赤石澤も神ノ鳴谷より 六月六日に東京發、 大島から西 するに出合へは真直ぐに下るのが賢 つたものらしく、路は崩れアッシュ

等こつたものを食はして吳れました ても乙で、こんにやくのごまよごし 大井川直参の水を使ふせいか味もと

椹島の豆腐屋は中々優秀でした。

のみが得意顔になつてゐますから夏

それで一圓二十錢でした。橋本屋と いふホテルは未だやつてゐませんで に入れさうです。 を發見しました。十人や十五人は樂 は面白くないと思ひます。 田代で瀧浪富士太郎、同要太郎の 大澤岳頂上直下へ深澤側へに大岩窟

したが、豆腐屋に泊るのも亦一興と

荒らされてゆきます。 聖の尾根はシロアイ澤の頭 二六 く目下考慮中との事です。 の二つが主ださうです。山は矢張り の入つてゐる澤は、倉澤と奧西河內 ブ見たいになつてゐますから。人夫 紙料の山に入つてゐる人夫衆のクラ 思ひます。それは此の豆腐屋が東海

人もゐるさうですが、未だ組合もな

者と思ひます。山を知つてるのは廿 すが若い所が强味です。第一の案内 オヤジさん、後者は山の方は後輩で

如く古い「山岳」に出て來る時計屋の 兩氏に會ひました。前者は御存知の

に廣く、白樺の美しい林がありまし 出ました。三角點附近は尾根が非常 薬樹の鉈目を探しつゝ三角點の上に | 機關があります。一人一囮で荷物は 又殘雪の爲めに消えてなく なり針 松の切り開けか明になりましたが、 わけ乍ら五稜を下りました。シロア 三二米)の少し手前迄は可成偃松を イ澤頭の十五分許り手前から古い偃 ばします。

ー及ロツスリユツケンを探勝、十五 大に御座候、十四日はシュワルツセ 日下山致し候 氷河と新雪の賜に輝く眺めは實に雄

でした。

七・一六・マイルホーフェンにて 矢田誠太郎

ウエイ西海岸に沿ひフイヨルドと氷 北端ノルドカツアに到着致し候 メルフエストを訪れ、唯今歐洲の最 に入り、昨日午前世界最北の町ハン 河を見物しつゝ、八月一日北極圏内

スイス 八月四日 矢田誠太郎

|別です。 静岡まで四時間たらずで飛 ら静岡へはリヤーカーといふ文明の た。大變な好待遇でした。口坂本か 泊六十錢下せいと云はれて驚きまし 一泊しました。烈日高いでせうが一 立派になりました。感じがよいので 大日峠の水吞茶屋は本年崎築して

チロル・チラータール

渡邊公平

ましたが間もなく伐採の跡が現れ、 た。三角點からは鉈目を頼りに下り

かされてしまひました。恐朝路らし 烈になり、踏跡もよく解らなくなつ 進みました。下るに從て痛い籔が猛 踏跡は見分け難くなつたので五稜に いものに出て椹島へ皈りました。 て遂に出合の上六○米程の小澤で寢 ついて聖沼日影沼の出合を目がけて 要 に居りし二三十分の間幸にも一時晴 米)に登攀その頂上を極め候、山頂 を山案内と共にメーゼレ (三四二三 リングを經てベルリナーヒユッテに り溪谷を探勝致居候、十二日ギンツ れ渡り周圍の山々は眼前に展開し、 一泊、十三日盛夏に珍しき大雪の中 七月五日伯林出發、 六日當地に登

> 先月二十六日ハンブルグ出帆ノル ノルウエ

に惨なものでした。 に晴れても二日とは續かず、まこと 高い所は毎日の様に新雪か降りたま 今年の夏の山は雨や風に祟られ、

様なので又此處に歸つて來たといふ した。同君は一週間程前に來てシュ ターホルンの姿も見えないといふ有 マットの方へ向かはれましたがマッ レツクホルンをやり雨なのでツェル 登高會の國分質一君と同宿になりま ルワルトに行きました。はからずも 七月十三日バリを發つてグリンデ

の峠は針木の様な感じでした。ブリ 私はミユレンからグリースアルプへ しました。國分君はブラバントと一 越へました。セフィネン、フユルグ 緒にエンゲルヘルナーに向ひました ぬ位山は白くフアウルホルンに散步 所でした。翌日は晴れたが冬と異ら ームリスアルプの眺めは實に見事 じました。 又雨、 る第二条の岩登りをやつて頂上へ達 しました。ダンデランには誘惑な感 1:

さんの宿べルビューに一泊、 それからツーンに行きウエストン 種々お フの飛行場から山岳見物飛行が行は れてゐる。會社はスイスで一番よい チューリッヒの郊外デユペンドル

思ひ浮べました。 セスの上から眺め、 記に出て來る此の邊の湖畔の平原を 話をする。辻村伊助氏のスウイス日 翌日オーベルラントの山々なニー ツェルマツンに

ゆきホテルモンテローザルに入りま グワルダーと一緒にモンテローザに で宿で世話して臭れた山案内のタウ したっ 七月二十二日は非常なお天氣なの

テローザへは私共を入れて三組、明 時に星を戴いて出發しました。モン 老登山家もゐました。翌朝は午前二 込められてゐるといふ實に山岳會の け方から非常な風が吹き始め、ザツ

々日は日飯りの山を選びウンテルガ 米以上の高所は最初の事なので風の アベルホルンへ同じ山案内と登りま 米といふ所で引き返しました。四千 した。此の山で一番面白いと云はれ 威力には驚いたことでした。その翌

ツターホルンで生き残つたタウグワ ルダーの孫とのことでした。 私の山案内はウインバーと共にマ 雨に送られて山から下りまし 翌日は

スイスにて

田中

行機はパイロットを入れて八人乘の アド、アストラ、エローといふ。飛 單葉。

私の生れて初めての飛行が如何に惠 は珍らしい朗かに晴れた日であつた まれてゐたかゞ解る。 八月一日は此の夏の不順な天候に

テルでは吹き倒されさうでした。天 候が愈々悪化したので頂上へあと百 登る可くベタンの山小屋に行きまし た。此の小屋にはもう二週間も降り りで有名なエンゲルヘルナーの岩山 の針の様に尖つた尾根の上を通つた 時であった。 多かつた。一番面白かつたのは岩登 瞭然で、成る程とうなづかれる事が した。複雑なアルプスの褶曲も折り 次第に高めつゝ橋でもかけた様に飛 地形の中央部な、北から南に高度な 狀に低下してゐる大アルプスの孤狀 千五百米代のリギを北に向つて階段 ストツク、二千米代のオプワルデン ーオーバーランドから三千米のダマ **疊まれて氷河谷も上から見れば一目** 行し、遂に四千五百米まで登りつめ てフインシュテラールホルンを見下 此の日のコースは四千米のベルナ

陰影、深い谷のひろげる大まかな谷 である。岩の彫刻の作り出す繊細な の飛行の行はれるのは意外に數少い つた。定員の不足、天候の關係で此 段として飛行機は今の處唯一の利器 壁の投影の面白味は確かに收穫であ 山を極端に異つた角度から見る手

田中

八五五

スイスにて

◇會員の方々が山に行かれた時簡單 に葉書にでも山の様子を御通知下さ 捨は編輯者に一任される事をお願ひ 紙面に制限がありますから原稿の取

## 山日記編輯に際して

九三一年版山日記は既に編輯に

ますの に御知らせ下さる様御願ひします。 には料金賃銀の改正等の事がある度 ◇山小屋所有者、

の方々からの山の様子、山小屋、

様子、山小屋、山の外に地方の會員

案内等に就ての御通信を期待してゐ

る事を希望します。

山案内組合の方々

ちな會と會員との連絡な、此の毎月 に三回の山岳では兎角疎遠になり勝 になりました。之を發行する第一の 主旨は、毎月の食務並に會の情勢な 會員に報告することにあります。 今后毎月此の會報を發行すること

成功でせう。 の會報で結んでゆく事が出來れば大

山界の情勢であります。會員諸兄の な役目は、其折々の山の知らせや登 れば大變に幸です。 殊に地方在住の方々の御助力を仰げ 其他に此の會報に果させ度い大事

來ました。乾燥無味に陥り勝ちな此 る事を希望致します。 の種の報告書に潤を與へる事が出來 意に依つて立派なものな頂く事が出 しました。御氣付の點を御通知下さ カットは會員茨木猪之吉氏の御好 第一號は先づ見本のつもりで編輯

たのを何よりと喜んでゐます。 茨木 氏に感謝致します。

の報告を御願する次第であります。 び山案内に關して左記の條項に就て

一、誤謬指摘 二、記載せざりし山

の多大なる御援助と忌憚なき御忠言 編輯に際し、山日記編輯委員は諸野 に関する研究會も開かれました。此 着手して居ります、來年度の山日記

を希望しております。就中山小屋及

る 山行のプランを立てる事の大切さに比し山行の重大さは良ル サツクと良山靴を撰ぶ事です 背になじまないルツクサ ツクと足に副はない山靴の使用は愉快な山行を完全に破壊し ます 愉快な山行には疲勞することのない新製された美津濃ルツク サツクと舶來品以上の美津濃山靴を撰ぶ事が第一です 小川町通り 田

神名京 古 戸屋都 大東 阪京

電.神田 (25) 3570.3571.3572.3573

### 管報投稿に就て

不二屋ビル三〇七號

日本山岳會山

通信先

芝區琴平町一番地五號,

日記編輯係

氏名。

屋の名稱、

位置。五、

報告者の住所

内の住所、姓名。四、主要なる岩小

三記載せざりし山案内組合又は山案

小屋の名稱、

位置及び其照會先。

締切 東京市芝區琴平町一 每月第一木曜日 ビルヂング内 日本山岳會會 不二屋

昭和五年十月三十一日 發行 報行所組 殺

東京市芝區寒不町一不二星ビル 岳倉 浦松佐美太郎

(刷印堂明開)



MIMATSU'S

### WINTER & ALPINE SPORTS

(登錄商標)

### **゙゚アールベルグ,スキー**゛

純正米國ヒツコリー材製 美滿津のいたや材製 共他各種

各種 締 具・スキー 靴 クレテル・サイル(検定付)

**氷斧** 24cm. 27½cm. 30cm. 33½cm.

**シユタイグアイゼン** 8 本 爪. 10 本 爪

スウイス製布地 キスリング型ルツクサツク 美 滿 津 特 製 羽 毛 製 シ ユ ラ フ ザ ツ ク 其 他 雪 上 露 營 用 具 各 種

合名會社 美滿津商店 <sup>東京·本郷·赤門前</sup>電話(小石川) 845.2071 山岳專門雜誌

## 山台溪谷

山

長替東京二八五一六番電話芝 六八一番東京市芝愛宕町二ノ一〇八東京市

三號(秩文特輯) 定價 五○錢 完價 五○錢 完價 五○錢 一部五〇錢・年極三圓(六册) 巻書店・百貨店・登山用具店にて販

冬山の用具は片桐へ

◇スイス製のピツケル アイゼン 新荷着◇

スイスピツケル T 2 T 5

 $C = 3\frac{1}{2}$ 

シユタイグアイゼン

エッケンシュタイン イ ラ ゴ ー ゼ プ リ マ

圖近日入荷品鹽

ザイル、コツヘル、ワツクス、杖、帽子 靴下、締具

アザラシの皮は是非當店へ

片桐テント登山具店 神田區今川小路二ノ四(九段下電車通)